

## 「ヨセフ物語」

2021年05月19日

イスラエル（ヤコブ）はヨセフをどの息子よりかわいがっていた。年を取ってからの子だったからである。それで、彼には長袖の上着を作ってやった。兄弟は、父が誰よりもヨセフをかわいがるのを見て、彼を憎み、穏やかに話すことができなかつた。（創世記 37 章 3 節～4 節）

創世記 37 章からは「ヨセフ物語」が始まる。最後の 50 章に、ヨセフの死が記されているので、37 章から 50 章を「ヨセフ物語」と捉えることができる。ところが後半には、ヤコブが度々登場し、49 章のヤコブの臨終における「祝福」の告知はイスラエルの歴史の先取りで、圧巻である。だから、「ヤコブ物語」の中に「ヨセフ物語」が挿入されているという見方もできる。主イエスに繋がる系図は、アブラハム、イサク、ヤコブ、そして、ヨセフではなく、ヤコブの四男ユダが継承している。「ヤコブ物語」の中に、独立した作品であった「ヨセフ物語」を入れたと見る方が自然ではないかと思う。

ヨセフ物語は、ヤコブの一人娘ディナを加えると 12 番目の子どもになるヨセフの波乱万丈の生涯を描いたものである。聖書では、神のみ旨は夢で示されることが多い。ヨセフは、幼い時から夢を見、夢を解く特別な才能が与えられていた。ヤコブは愛妻ラケルが産んだ、しかも、高齢で得たヨセフを偏愛、溺愛した。そのことで、兄たちに憎まれ、奴隷としてエジプトに売られる。エジプトで孤独の中、理不尽な苦労を重ねるが、夢を解く能力が認められる。時に、ヨセフは、ファラオが見た奇妙な夢を、世界に飢饉が襲うと夢解きし、穀物を蓄えるように進言する。夢解きを評価され、ヨセフは破格の出世をし、ファラオに次ぐ地位を得る。飢饉に備えて蓄えた穀物を持って、エジプトは莫大な富を得る。カナンにいたヤコブ一族も飢饉に襲われ、エジプトのヨセフの元に、食料を買い求めにくる。ヨセフは兄たちを認めたが、兄たちはヨセフとは気づかなかつた。ヨセフは、兄たちに虚々実々の駆け引きをし、自分をエジプトに売ったことへの悔い改めを確認しようとする。四男ユダの切々と訴える、父ヤコブと末の弟ベニヤミンに対する愛を聞き、ヨセフは心を開き、和解の手を差し伸べる。ヨセフは、「私はあなたがたがエジプトに売った弟のヨセフです。しかし今、私をここに売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神が私をあなたがたより先にお遣わしになったのです」と告白する。歴史は神の救済史であるという告白が、ヨセフ物語の核心である。

アブラハム、イサク、ヤコブの族長たちの物語は、人間のリアルな生き様が描かれている。信と不信が交差し、希望と危機が混在しながら、その中で、彼らは信仰的に成長していく。一方ヨセフ物語は、夢解きという文学作品的な手法を用いて、歴史は無目的、無秩序に流されているのではなく、理不尽な苦難を負わされるが、神が人間を救うために配備支配の下にあるという摂理信仰をドラマチックに描いている。

父ヤコブは死んだと思っていたヨセフに再会し、歓喜する。ヨセフに誘われ、ヤコブ一家はエジプトに下り、滞在するようになる。この文脈が、エジプトの奴隷になっていたイスラエル人の解放という救済の出来事につながる状況設定となっている。

ヨセフ物語は、父ヤコブは長袖の上着を特別に作ってやるほど、ヨセフを偏愛したので、兄弟たちはヨセフを憎み、穏やかに話すことができなかつたと書き始めている。